

## 禪教養普遍化に關する圖式

小笠原秀實

一  
圖式なるが故に、すべて詳細叙述が他日に譲らるべきである。

二

「汝自身を知れ」とか、直指人心見性成佛とかいふやうに、最も手近なものを標示して眞の自覺を呼び醒すといふのは、誠に親切であり、又適切である。然しこれがあまりにも手近であり、あまりにも適切である爲に、却つて多くの混亂が簇生する機縁をさへ含む。

自分に取つて自分ほど近いものはなく、人間に取つて人心ほど適切に實感されるものは無い筈であるのに、これが最も不可解なものとならざるを得ない機縁が絡み合つてゐる。たとひ太陽の重さを測ることが出来ても、自己の眞髓を知ることとは出来ないときへ詩人は歎聲を洩らしてゐる。人間に課せられた疑團の中、これほど不可思議にして、而も抛つて置くことの出来ない謎はまたと無いのである。

三

全く逆立する場合のやうに見えて、これと全然同じ類例に相當する他の疑團が擧げられる。

始めて繪畫の習得を志して門を訪ねる青年に向つて、師匠は一つの林檎を提示し、見える通りに畫きなさいと教へる。

そして従來傳統化されてゐる筆法、手法は何れもマンネリズムに墮在してゐるから、その餘弊を受けない方がよろしいといふことを懇切に注意する。何故ならば藝術の眞髓は實在に肉薄することであり、自己の生命力を以つて自然の本質に喰ひ入ることであつて、概念化され、技巧化され、俗情化しないことにあるからだと言示される。誠にあつてほしい善き指導である。さてこの指導に従つて青年畫家は何を爲すであらうか。林檎を前にして見えるまゝを畫くことに努力する。然し「見る」「見える」かうしたことの意味は誠に晦澁である。眼球に附帶するあらゆる筋肉を緊張させ、ある時は目を見張り、又ある時は極度に目を細め、或は形に於て、或は色に於て、所謂「見える」まゝの實在を描寫しようと努める。かくして出來上つた精巧な仕上げを師匠の許に運ぶ。一見して師匠は、「ありのまゝの實在が見られてゐない、概念的なものを離れて端的に實在に向つて突き進みなさい」と批評するのが、殆んど一般的過程である。かくて「見る」とは何か、實在とは何かといふ疑問が宿痼の如く精神に絡むのである。

これは外物を見ることであるが、これが誠に困難である。眼ある故に見得られるのであるにも拘らず、眼が無いのと同じ無力である。自己は近過ぎて自覺されないが、外物も亦觸接するも見得られないのである。

見性も亦、性を見るのか、見即性か、さうした疑問を捨離することが、内外、自己、何れにしても、極めて手近でありながら、遠く離れて太陽の重量測定以上に遠心化するのである。

この際、眞の親切、眞の化導とは何を意味するか。

機縁に依り親切が不親切になつたり、又不親切が親切になつたりすることがあるから、單に親切といつても甚だ複雑である。

「忽ち人に如何なるか是れ禪と問着せられて、便ち拳を堅て、喝を下し、目を怒らし、眉を蹙へて胡亂に支へ將ち去る。」(寂室和尚語録)

これは不親切といふよりも、古昔、禪者の餘弊指摘である。これとても機縁に合すれば好き効果を生み出さぬとは限らぬ。是非すべきではないにしても、差當り有りたき態度はかうしたものでない。

寂室和尚もこの種多くの餘弊を指摘した後、禪者として必ず有らねばならぬ要領條件を十箇掲げ、その第七に本來の面目を看取することを要請されてゐる。

「七には父母未生前、那箇か我が本來の面目と看んことを要須す」

がそれである。本來の面目は、上掲、直指人心であり、汝自身であり、更に又實在自體である。それは最も近く、誰れにも解らぬ筈はないものであるに拘らず、事實としては手のつけようのない無孔鐵鎚である。無孔鐵鎚として取扱はれねばならぬ性質のものであるが、やゝもすれば、大法の權威を高めんが爲に、強いてこのことが強調される場合もある。これも亦有つてよく、更に有らねばならぬ場合さへも見出されるのである。然し手のつけられぬ無孔のものに、一大慈悲を以つて強いて端的を開示されたいと云ふ懇願もあり、これに對して手のつけ方も古來屢開示されてゐる。かゝる慈悲心の一端が、着實に、現實に對應して提示されることは、學者の喜悅たるのみならず、實に三世諸佛の聖旨にも即應すべき筈

のものである。

## 五

數名の刺客に襲はれた老政治家が、短銃を擬せられた時、「話せば解る」と叫んだ。刺客側は、「問答無用」と云つて發砲してしまつた。何れにも理由がある。「話せば解る」は言詮可能を認めてゐるのであり、「問答無用」は言詮の打切り、不可能の斷に立つてゐるのである。是非は情勢の如何に依つて決せられる。言詮可能の領域にあるものを、早くも不可能の限界に迫らむのはよろしくなく、又不可能所に到達してゐるのに、尙言詮の閑事を弄するといふやうなことはよろしくない。政治的要求などに於て、責任者が何の誠意も示さず、一時の糊塗曖昧を繰返してゐるならば、言詮無用の場合ともなる。又相互に理解性ある人間間の葛藤であるから、情理を盡し、虚心坦懷に事實の解明に向へば、目的の達せられる筈である。この意味に於ては、「話せば解る」のである。教外別傳は、教なるものが教の目的を失墜し、拔苦與樂の聖旨を失ひ、戲論の取り遣りに埋没しまつてゐる場合に警告された親切であり、言詮が全面的に有つてならぬといふことを指示されてゐるのではない。正邪の機微を決するものは、言詮に於て、拔苦與樂の親切が含まれてゐるか、何うかである。

## 六

これらは、教へる側についての考察である。同じことが受ける側、上求菩提の場合にも適用される。知らんが爲に知らうとしたり、他より一句底を多く言はんが爲に學ぶといふ態度に對しては、不立文學の聖意に添はねばならぬ。然し拔苦の願心にもえ、生存苦の現實に悩んでゐる者に對しては、事情に依り、又段階に應じて、和顏慈語の言詮指示が有つても

差支ない筈である。學者としては、和顔慈語の教導に預かれるだけの純情、離苦得樂の熱意を磨ぎ持たねばならぬ。

教學一般の通弊は、佛道の本旨、即ち拔苦與樂、離苦得樂の根本義を閑却し、名利恭敬の末に走りがちであることに歸着する。拔苦の根源に肉薄しなければ、有も非、無も非、中も非、言詮のみならず、言詮の否定も亦非である。逆に拔苦の親切、離苦の誠意よりすれば、有も是、無も是、言詮も是、言詮の否定も亦是である。機微正に切實なる人間苦、生存苦をめぐつて擁立されるといふことにある。

## 七

教學の意、支那古代にあつては、教は教ふる者の側、學は學ぶ者の側に屬してゐる。「教ふるは學ぶの半なり」といふ解釋もあり、教へながら學ぶの義が認められてゐる。人間の生涯、完成し切るといふことはない修道過程とすれば、一生悉くが修道の第一日である。安住過程とすれば、完全に拘らず、日々好日である。

「學成り名遂ぐ」といふ成句も學けられるのであるが、人間が約束の上できめた學と名とが、規約通りに完備したといふまで、大自然、大人間の客觀的實狀が、天眼通者のやうに、看破されてゐるといふものではない。約束の上から一應許されたものがあるといふまで、法界の眞理性より云へば、不斷の探求者であり、息みなき實踐の行者たるべきである。教ふるは常に學ぶの半である。

かくて教ふるものも學ぶものも、たえず即今の苦であるもの、苦境として悩み感つてゐるものへの省察を怠つてはならぬ。價值はこの苦を打消すことに依つて擁立されるからである。

## 八

求むるものゝ有る處、願心の生れ出づる處、必ずそこに苦がり、認識がある。所求、所願なき處には、咏歎があり、遊化三昧があるのみである。

咏歎、遊化なく、所求所願ある場合、教と學と二面に互り、各我が苦とするもの、苦因となつてゐるものゝ分析省察に進まねばならぬ。これが抜苦、離苦の根源であり、教主、四諦の理もこのこゝから誘發されてゐる。

## 九

かりに肉體が何かの病に罹つたとする。突然重病の場合は別であるが、軽い場合、いろ／＼自己省察に依つて解決されるやうな場合には、我が知能を盡して療養を考へる。次には通俗的な醫者にたよつて見る。これらのことで快癒されることもあり得る。省察、分別、教理の効果が現前してゐるのである。

かうした程度で済まぬ場合、専門の醫師にたよる。その指示に依つて全癒すれば、これも亦教理の効果である。更に重病であり、専門醫諸家の意見が違ふとする。かうした場合適從する道がない。

醫といふ學も人間生理の全體を悉く知つてゐるのではない。醫師は國が約束の上から認めてゐる一つの業務に過ぎない。大自然に通曉してゐるものでもなければ、妙術の極を究め盡してゐるものでもない。これにあらゆる病の根治が出来る筈はない。心がけ善き醫師は、たとひ醫としての認可を得てゐるにしても自ら許さず、絶えず研究に没頭し、新事實の發見並びに療術の効果を考へてゐる。許され得る限り、すべての醫師がこの道々の爲めに熱心たるべきである。こゝに於ても亦、教ふるは學ぶの半なりである。

時代醫學の全力を以つてするも、不治の病とされるならば、こゝで省察、探究の窮極に達し、教學の限界點となり、甲

論乙駁の低迷事となる。然しこゝまでは教學に依つて指導されてゐるのである。

人間苦、生存苦、精神苦の場合も亦かうした過程があり、教と學とに依つて導かれ、救はれ得る範圍あると共に、教の側に於ても、念々切實に、我が苦因、全法界の苦因に精密なる分析省察を企圖しなければならぬ。證悟を許されてゐるとしても、名醫に不治の病あると同じく、法界の大法には通じてゐないものがあるのであり、「發して節にあたらざるもの」のある筈である。我が苦に引き當て、法界苦に準用して適切であることを念々に勸行修道しなければならぬ筈である。

## 10

思想史全般を通じて常に現はるゝ認識の餘弊は、思索の形式化であり、實感の超越化である。古代に於て神は生活の實際、禍福の規定者としては無くてならぬ存在であつた。禍福の現實感と神の規定力とは不可分の因果關係があり、神の意志の外に重大なる禍福の規定原理はなかつた。然し經驗と實感とは、その進行に於て別の事實に遭遇せざるを得なくなつた。それかと云つて新しき經驗と實際的事實を統率するに足る偉大なる新原理の把握に進み得るといふことは容易でなかつた。神は殘存したのであるが、昔日の如く一義的の規定原理ではなく、この間ある度の分離を孕むことになつた。分離がやがて超越化の端をなす。そしてこの傾向が激化するに従つて超越的實在としての神の認識が強要される。超越者は合理的根據なく、又體認的是正なく、たゞあらねばならぬからあるといふやうに論斷される。「あらねばならぬ」は極めて偏狹なる、特殊的なる身分、職責などから割り出される場合も甚だ多い。Sterling Barry が基督教と佛教との一致點を擧げてゐるその一つとして、共に先行宗教の儀式化に反し、内生命に關する正しさを要點としてゐることを指摘してゐる。曰く外面的儀式が重視される場合、儀式は無用といふよりも有害となる、外面的儀式は自己欺瞞へ導き、非實在的な

るもの、低劣なる道德標準へと導く、心情の淨化は正道の達成に取つては、他のすべての努力にも優越しなければならぬと。(Christianity and Buddhism, p. 216-7)。儀式並びに外的表示がすべての虚偽の筈はないが、餘弊としては當然この種のものとなる。餘弊の根源をなすものは、形式の超越化である、價値の源泉たるものが、各の人々の實感實情から隔離されてあるといふことである。

かうした場合、思想史的一大修正はたえず超越者を内在的なるものに引ひつけることであり、形式を内容に、戯論を實感に照合することである。この結果、人間の純正性が一層純化されると共に、概ねこの益を蒙る人々の數が前時代とは遙かに多く、且つ廣い範圍に廓大される。時には文化の階級的廓大となり、又社會生活の基本形態を一變させる點にまで到着する。

## 一一

不立文字とか、教外別傳とかは、文字そのものが悪いのではなく、又教理、教義、經典が全面的に悪いのではない、超越化の餘弊に陥つてゐるのが善くないのである。従つて又人間の推理力、識別力、批判力が悉く邪妄ではなく、實感、實情を離脱し、理の爲に理を弄び、分析の爲に分析するのが正統でないといふのである。前時代の儀式化し、超越化し、一部の人々の戯論化してゐたものを内在化し、拔苦與樂の實感を擁立したのが佛教の時代的使命であつた。然しこの内在化、四種姓平等の普遍化が、何時の間にか超越化し、職業化し、一般人間の拔苦與樂性を喪失しようとする傾向に對して一大進路の開示されたのが直指人心である。これは直指佛教でもなく、直指宗教でもなく、正に直指すべきは人心であり、内在的實感である。有無の辯證でもなく、枯木冷灰の判斷中止でもなく、心あり、覺知あるものゝ拔苦與樂であり、



離苦得樂である。心作用の動と不動とが標準をなすのではなく、苦と樂とが軌道の正閏を決定する。苦惱への道を指示するものは閏、淨樂を誘導するものは正である。證れるものとして許されても、苦惱内心に簇生するならば迷であり、迷へりと叱責されても、淨悅、心内に溢れ高るならば證れるのである。迷悟の差、外部の規則法令に依るのではなく、純化せる法悅の自證に安住し、他に求むべき何ものもない自足が規準となるのである。超越化せる證道安住心を、我が自覺の内部に引きもどすことが内在化の方途である。曾て直指人心は超越化するものゝ内在化原理であつた。そしてこの原理は時代の行進と共に、世相の推移、職域の固定、文化の分裂的自恣の爲に、空しく超越化の危険に遭遇したのである。たとひ全面的でないにしても、直指すべき人心も超越化し、見性の淨悅も彼岸のものとなつた。それは遠く初祖達磨大師に附着され、その後嫡々相傳の正脈にのみ傳はり、漸く一箇半箇の法嗣のみが細い煙を傳へ護持するに過ぎないといふ感を與へる。これは大法の尊嚴を擁立するものとして意義深いのであるが、又その餘弊として、大法の獨占形態をも現象化さす。禍根すべて人心、見性の超越化に萌す。これを曾ての教祖、開祖の内在的實感精神に復歸させ、人々具足、箇々圓成を理想通りに實現さすべき時運に到來してゐるのである。この目的の爲にはすべての神秘性、格段なる奇蹟的靈能性を批判し、露堂々の出發を敢行しなければならぬ。教も學も、能化も所化も人々具足の内在性質感性を、明瞭に表示して、拔苦與樂、離苦得樂の本道を邁進すべきである。

## 一一一

直觀とか、直接把握といふ言葉は絶えず使用されてゐるのであるが、眞意味は概ね常に明瞭ではない。それは數千年に互る思想史上の謎の如き容態を示す。場合に依り、使用者に依り、さまざまに意味付けられてゐる。然し殆んど多くの場

合、言詮に依る分析説明の不可能なるもの、合理的推論の彼岸であるもの、特に許された天賦の能力であるものなどの義が含まれてゐる。最後の意味は別として我々の經驗にかゝるもの、存在してゐることは事實である。最も單純な感覺は、如何なる推理をも含まず、分析の結果でもない點よりすれば、この意味に該當し、感覺即直觀であるとさへいふことが出来、又かうした使用法も存立してゐるのである。冷煖自知は既に直觀であり、實感であり、誰れにも具備されてゐるものである。特に神秘的に超越化される要はない。かうした自明のもの、外に、尙複合的な高遠なる直觀ありとするならば、それは何かの形に於て分析可能であり、言詮への親切が意圖されるべきである。たとひ月を指す指に過ぎないにしても、指示、利導の無いよりは遙かに増してである。指すとなれば、努めて直指されたいのであり、わざ／＼指を曲けて、あちらか、こちらか解らぬやうな指し方は教の本旨に合致しない筈である。

教祖釋迦佛内證の眞意は誠に高遠たるのであり、それは神秘にも附せられ、又靈能的直觀以外には模索を許され得ないものであることに何の疑もない。然し教祖自身は強いてこれが分析開明の方法を取り、四諦の理として合理的に納得される得る教理を開示し誘引されてゐる。時代の推移と共にこの説明にも晦澁な諸點を持つことになつてゐるであらう。然し當時の認識としては誠に正確であり、従つて又明確であつた筈である。さうでなければ大法の存続し、末葉の繁榮を見ることは出来ないからである。大慈悲心とはかゝる親切に外ならぬ。

このことは教相なるもの、煩瑣を繰りかへせといふことではなく、又徒らに饒舌道に墮落せよといふ意味では決してない。すべての思想が老衰期に達する段階に於ては、必ず現實的實感を離脱して、全く超越の朦朧化を提示する通弊を脱却したいと云ふ願心に過ぎない。最初是人々具足の人心を直指せよと教へられたに拘らず、時の移るに従つて、この内在性が超越化し、摩訶不思議の存在體の如き想念を暗示する危険を包藏するに到ることを警戒したのである。そして直指人心

の目的は他の何ものでもなく、離苦得樂を實現したいことにある。

### 一三

たとひ太陽の重さを測ることが出来ても、自我の眞髓を知ることが出来ないといふ自我の幽玄化も、自我を特に超越化の過程に投射することより来る一つの悩みであり、又自我の純化を一段の深處に深め行きたいといふ要求實現難の歎聲である。超越化より来る悩みは現實的内在に取り戻すべきであり、純化への精進は萬難を排して眞實の一道を邁進すべきである。すべてこれらの標準たるべきものは、現在心に自覺納得され得る淨悅の正純性である。

「ありのまゝの實在を畫け」といふこの實在も、藝術としては内心の造型的悅樂である。悦びは物自體に具るのではないから、我が内生命の閃光として、自ら創造し、觸發すべき管のものである。たゞこの創造と觸發とが、造型的、形體的なるものに結合する關係上、外物から何かの暗示、機縁を享受したいといふので特に外物に向ふのである。外部自體を注視しなければ暗示の享けようはないが、然し觸發し創造するものは内生の價値であり、光と形とに即應する精靈の歡喜である。かゝる關係を明示せず、「ありのまゝを見よ」「傳統に囚へられ、マンネリズムの頑洞に墮在するな」といふのは、言語端に於て尙盡されねばならぬ親切が省かれてゐるのである。それは不親切といふよりも、教へる側の自己省察、自己分析が缺如してゐるのであり、洞察の貧困である。

本來面目の提示も亦、能化所化兩面に互つて自己省察と自己分析との精を熏し、人間認識の全機能を適用して、合理納得の正見、正思惟道を踏み進むことが、現在としては要請的である。そは超越曖昧化の主體を最も確實なる領域に内在させ開發させ得る大道だからである。